



TITLE:

京大広報 No. 641

AUTHOR(S):

京都大学総務部広報課

CITATION:

京都大学総務部広報課. 京大広報 No. 641. 京大広報 2009, 641: 2803-2824

ISSUE DATE:

2009-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/196445>

RIGHT:



京大広報

No. 641

2009.1



第3回京都大学ホームカミングデー
—関連記事 本文2808ページ—

目次

新しい年を迎えて	総長 松本 紘	2804
〈大学の動き〉		
部局長の交替等		2808
新年名刺交換会を開催		2808
第3回京都大学ホームカミングデーを開催		2808
名誉教授称号授与式を举行		2809
第12回京都大学国際シンポジウムを開催		2809
自衛消防団員に対して感謝状を贈呈		2810
総長主催「外国人研究者との交歓会」を開催		2811
平成21年度入学者選抜学力試験 (第2次学力検査等)の実施日程		2811
〈部局の動き〉		
サービス・イノベーション国際シンポジウム を開催		2812
大学院情報学研究科創立十周年記念行事を举行		2813
〈日誌〉		2813
〈寸言〉		
京大らしさ	増田寿幸	2814

〈随想〉	
「fundamental」と「basic」な基礎研究	名誉教授 井上 信
2815	
〈洛書〉	
京大生をデータで見る	溝上 慎一
2816	
〈栄誉〉	
坂口志文再生医科学研究所長が慶應医学賞 を受賞	
2817	
〈話題〉	
工学研究科附属環境安全衛生センター主催 「空気呼吸器装着実技講習」、「普通救命講習会」、 「桂キャンパス消火器訓練」を実施	
2817	
テクノ愛'08最終選考会を開催	
2818	
JSPS-VCC 拠点大学交流事業「環境科学」 第3回包括セミナーを開催	
2819	
化学研究所「第108回研究発表会」を開催	
2819	
平成20年度能楽鑑賞会を開催	
2820	
〈隔地施設紹介〉	
防災研究所附属地震予知研究センター 阿武山観測所	
2821	

京都大学総務部広報課

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

新しい年を迎えて

総長 松本 紘

新年あけましておめでとうございます。皆様方とともに、新しい年を迎えることができ大変うれしく思います。

昨年10月の新体制発足以来、早くも3ヶ月が経過しました。いつの間にか秋から冬へと時が過ぎ、「ただ過ぎに、過ぐるもの、春夏秋冬」と詠んだ清少納言の言葉が身にしみます。私の総長としての任期の6年、すなわちおよそ2200日のうち約4%の時間がすでに過ぎたことになります。この刹那ともいえる期間に、オックスフォード大学、パリ研究院、中国の復旦大学、台湾大学などを訪れたほか、ストックホルムでの益川先生・小林先生のノーベル賞受賞式という晴れの舞台に陪席する機会を得られましたことは、この上もなく光栄な出来事でした。ノーベル賞に限らず、研究および教育の世界には様々な榮譽がありますが、今後も途切れることなくこれらの榮譽に浴する方々を京都大学が輩出しつづけていくことを総長として期待しております。

さて、総長就任式での挨拶でも述べましたように、大学を取り巻く環境の変化は激しく、それへの対応や10年後を見据えた大学の改革など多くの課題を京都大学は抱えており、これまでの3ヶ月はその課題解決の準備に追われました。本年は実行の年であり、課題解決のための施策を具体的に実施していくことが重要です。

昨年後半には、世界経済が大きな嵐に見舞われ、米国のサブプライムローンに端を発した金融危機は多極的、複層的に絡んだ世界に甚大な影響を与え、「ハケン」という言葉が米国の覇権主義や「派遣社員問題」などで頻繁に用いられるなど、社会情勢の大きな変化が雪崩を打つように起こり始めました。バックスアメリカナの終焉を暗示しています。米国一極支配から多極構造への脱皮、お金万能の世界観の転換期とも受け取れるでしょう。行き過ぎた自



由市場経済は過度の競争をあり、自制心を失ったマネーゲームと化し、競争原理が行き過ぎて正当化され、大学にまで押し寄せています。適度な競争は歓迎すべきですが、本来社会の基軸となるべき大学の機能が失

われないよう、大学自身も社会も政府も考え直し、大きく出直しを図る時ではないでしょうか。

本年は、十干、十二支では「己丑(キチュウ)の年」に当たります。十干の「己(キ、ツチノト)」は、河西善三郎氏の解説によれば、先の曲がった梢の先の芽が伸び、起き上がってくることから新しいことが起きることを意味する「起」とも、曲がりくねった糸の端を表す「紀」にあたるとも言われています。後者は「乱れた糸をほぐし、糸筋を正し、乱れを正す年」を意味するそうです。

一方、十二支の「丑(チュウ、ウシ)」は右腕を伸ばす形からきており、これも芽が曲がりつつも伸びようとする様を表しているそうであります。従って「己丑、ツチノト、ウシ」に当たる今年は、まさに混沌、混乱から脱出し、正しい方向に向けて出発する年であります。また「丑」の文字がカタカナの「ユ」と「メ」の合成のように見え、「ユメ」も暗示しています。従って「おおなる夢」を抱き、京都大学もこれから新たな芽を出し、大学のみならず、社会全体の改革に取り組み、「牛歩」のごとく確実に歩を進める年と考えています。高村光太郎の詩集「道程」にこういう下りが有ります。「ひと足、ひと足、牛は自分の道を味わってゆく。一歩出したら後ろへはかへらない。」京都大学は牛のように確実に前進し、後ろには引かない気概で進むのが良いと考えます。

以下に、昨年1年を簡単に総括し、そこで明らかになった課題および今年の計画について、九つの項

目に整理して述べたいと思います。

1) 教 育

一昨年度の大学設置基準の改正以降、各大学はアドミッション・ポリシーを明確にすることが求められています。本学においては、各学部・研究科で策定が進んでいますが、同時に全学のポリシーの策定も必要と考え、理事、理事補、教育推進部長などが中心となり原案を作成していただいております。また、初年時教育の重要性を考え、全学共通教育のあり方の検討に入るとともに、課外活動に関する教育のあり方の検討を始め、青年期の適応、高校から大学への移行、専門教育との接続といった「移行」に関する諸問題、キャリア教育などについても検討を加えています。

「教育」面の重要性に鑑み、学部・研究科のみならず研究所・センター教員も含めた部局横断的な教育計画、教育方針などの情報交換が必要と考え、それをもとに今後全学的に教育のあり方を考えていきます。

また、「多言語教育10ヶ年計画」の実施に向けて、国際学生育成(留学生および本学の学生一般の国際化の推進)を重点施策として打ち出す準備を行っています。それと同時に、KCJS(Kyoto Center for Japanese Studies)学生のいっそうの受入促進に向けての準備作業を開始する予定です。

2) 研 究

研究に関しては、本学の基本理念を踏まえつつ、研究戦略タスクフォース、研究戦略室および研究企画支援室を整備し、本学の研究支援戦略の方針等の議論、研究資金の獲得への支援など、研究支援のモデルケースを確立してきており、世界トップレベル研究拠点プログラム、グローバル COE プログラム、科学技術振興調整費などの競争的資金を今後も積極的に獲得していきます。

また、iPS 細胞研究の推進に向けた取り組みを加速させていくことも重要と考えています。昨年は内閣府総合科学技術会議、文部科学省等の強力なパッ

クアップを受け、iCeMS に iPS 細胞研究センターを設置することができました。今後も、全学を挙げて iPS 細胞研究などを支援したいと考えています。また、昨年は「先端医療開発特区」に本学から3件の課題が採択され、その推進に向けた新たな取り組みが必要であります。

さらに、「将来の世界トップレベルの研究者となる人材の育成」を目指し、優秀な若手人材を世界中から集めていく本学独自の「白眉プロジェクト」(仮称)を始動し、本年秋には制度として発足させたいと考えています。

3) 企画評価および組織

大学の教育研究活動状況については、機関別認証評価を7年ごとに受けることが法律(学校教育法)で定められています。昨年3月、本学はその認証評価を受け、大学評価基準を満たしていると評価されました。また、平成20年度は、第1期中期目標・中期計画期間における暫定評価を受けることになっており、昨年はその準備にあたりました。そして、その評価結果は本年3月に示されることになっています。

今年の最重要案件として、平成22年度から始まる次期中期目標・中期計画をどうするか、ということが控えています。次期の文部科学省の基本方針は、中期目標・中期計画を最大でも100項目以下に絞り、しかも6年間で達成評価可能なものに限定するように、となりました。提出期限は本年6月ですが、現在、全学を挙げてその準備にあたっています。

また、平成22年度から附置研究所・センターの位置づけが大きく変わろうとしています。国が「共同利用・共同研究拠点」に認定したものを重点的に支援するというもので、京都大学には多数の附置研究所・センターがありますが、それぞれ拠点に認定されることを目指し、準備を進めています。

こうしたもの以外にも、新しい教育研究組織が整備されつつあります。昨年は、野生動物研究センター、文化財総合研究センター、宇宙総合学研究ユニットが設置され、さらに全学寄附研究部門として「京都大学微生物科学寄附研究部門」が設置されまし

た。

また昨年、教員評価を初めて実施しました。3年以上在職している教授を対象に「教育」、「研究」、「診療」などでの活動を調査しました。今後、3年ごとに教員評価を実施しますが、今回の経験を踏まえてさらに内容を充実させていくつもりです。

さらに、京都大学が誇る優れた人材の活用については、国際展開による人材活用とともに、研究者をサポートする中間職の創設に関して検討を始めました。

4) 情報基盤整備

日進月歩で変化している情報基盤に関しては、古くなった本部地区デジタル交換機(PBX)を更新、さらに学術情報メディアセンターの汎用コンピュータのリプレイスに伴い、高速化・安定化を図るためKUINS 機器を更新しました。また、電子事務局の充実に努め、全教職員が利用できるように環境を拡張し、全学グループウェアとしてサービスを提供しています。学生に関しては、学生用のポータルサイトを構築し、教育推進部と協力し、京都大学教務情報システム KULASIS の全学展開を進めております。本年は、こうした情報基盤の充実に努め、全学認証基盤構築に向けてさらなるサービス向上を目指す予定です。

附属図書館は、「重点事業アクションプラン」の一環として、学生・教職員へのサービス強化のための大改装が行われており、1階部分に24時間オープンの学習室が設置され、3階も情報機器の更新やグループ学習用の部屋の新設が進められておりますので、改装後の利便性の向上が期待できます。

5) 施設整備

昨年は「京都大学耐震化推進方針」に基づき、施設の耐震化に努めました。平成18年度当初に63%であった耐震化率が本年には80%に向上する予定です。また、寄附事業である「稲盛財団記念館」が昨年10月に完成、医学部附属病院「積貞棟」(寄附病棟)の整備に着手、「重点事業アクションプラン」により7月に

は白浜海の家、10月には課外活動施設(ボックス棟)の一部が完成し、宇治地区の「黄檗プラザ」の整備も順調に進んでいます。

その他、「世界トップレベル研究拠点プログラム」の一つである、iCeMS の拠点整備、iPS 細胞研究の全国的な研究拠点となる「iPS 細胞研究拠点施設」の整備にも着手しました。

今年は昨年同様、施設の耐震化に努めるとともに、桂キャンパスの工学研究科の物理系施設についてPFI 事業実施に向けて作業を進めます。併せて吉田キャンパスの狭隘解消、施設の有効活用等の整備を推進する予定です。

また、全学的に省エネルギー対策にも鋭意取り組んでいきます。

6) 環境整備

平成20年の特別な取り組みとしては、環境計画の策定と環境賦課金制度の創設があります。環境計画および環境賦課金方針に基づき、各部局から提出された平成20年度事業計画案が審査されました。この審査結果を基に、実施する事業の決定を行い、現在3月末の完了に向けて順次契約・執行の手続きを進めているところです。

平成21年4月以降には、環境賦課金制度により実施した事業の効果が実際に数値となって現れてきます。今年1年で効果検証を行う場合の着眼点をはじめ、具体的なルール造りに全力を挙げて取り組みます。

7) 財 務

平成18-20年度の期間は、重点事業アクションプランを実施してきました。目的積立金、重点戦略経費を財源として、総額約220億円の予算で、教育、研究、学生支援等を総合的に推進し、平成21年度中にその計画を完了する予定です。資金運用に関しては、国からの運営費交付金削減(年1%)をカバーするため、資金運用を開始し、平成20年度は目標額の運用益4億円を達成できる見込みです。これにより、部局への配分額の削減を回避することができると思

われます。大学の財務状況としては、「財務報告書 Financial Report 2008」にまとめられており、これには、京都大学の財務状況と関連のトピックス、財務上の課題がわかりやすくまとめられており、外部からも高い評価を得ています。

8) 産官学連携

産官学連携を推進するために、産官学連携本部・産官学連携センターを設置しました。ここで、理工農学分野、メディカルバイオ(生命科学)分野、ソフトウェア・コンテンツ分野、iPS 知財特別分野を設け、京都大学の研究者の知財確保・ライセンス・ベンチャー育成等を集約的に支援しています。また、ライセンスなど産官学連携関連収入は、順調に増加しています。

産官学連携の国際化に関しては、文部科学省の「産官学連携戦略展開事業」によるプログラム「国際的な産官学連携活動の推進」(平成20-24年度)に採択され、それにより、①グローバルネットワーク構築、欧米との連携強化(特に英、仏、独など)が進展中です。また、②産官学連携欧州事務所(ロンドンオフィス)を2月に開設する予定です。また、iPS 関連では、iPS ホールディングズ、iPS アカデミア ジャパンを設立し、iPS 関連のライセンス、事業化等を支援しています。

9) 渉外および外部戦略

新体制の特徴の一つは、外部戦略を担当する理事を新たにおき、その下に外部戦略室を設置したことです。ここでは、①大学基金、②寄附金、③国際展開、④人材活用、⑤京都大学同窓会の5分野について、現状の把握・整理および戦略策定を進めています。

今後の大学運営には、健全な財政基盤の構築が必須となります。それには、欧米の大学のように確固とした大学基金を充実させることが極めて重要となります。京都大学にはそれぞれ活発に活動している各部局・専攻毎の同窓会がありますが、今後基金の

有力な母体となる京都大学全体の同窓会を、地域の同窓会も含めて、活性化していくとともに、京都大学が全国に展開されている京都大学関係者に対してきちっとしたサービスを提供していくことが肝要と考えています。

今後は、①東京地区に同窓生、教職員および学生も利用できる施設の実現検討を進めます。また、②基金・寄附金の充実のための施策を実行に移し、学生支援・研究者支援の体制を構築していく予定です。

以上、京都大学の現状と展望について、それぞれの項目ごとに述べさせていただきました。

私は大学と社会の関係について常々考えています。最近形になり始めた考えを「大学基軸論」と「大学土壌論」と呼んでいます。前者は、人間の可能性はぐくんできた職場や家庭の弱体化・流動化・空洞化が進むにつれて、大学あるいはそこで進められる先端的な研究や高度な教養教育が人間の基盤を築く営為として大きな可能性を持ちうるのではないかということです。後者は我が国および人類の将来や人類全体の生存にとって、大学は知の淵源、衍沃な大地の如く、そのあるべき姿を保ちうる限り、永遠に枯れることなく人材と知恵を生み出しうる存在であるべきではないかということです。その意味で、社会にとって大学の存在は決して軽くないということを訴え続けたいと思います。

私は本年を、伝統を基礎とし、革新と創造の魅力・活力・実力ある京都大学を目指す改革の実行元年に位置づけたいと思います。

時には牛の涎のごとく粘り強く、時には猛牛のように果敢に、そして牛歩のように一步一步、力強く諸課題に取り組みたいと思います。この改革には、京都大学の教職員、学生および同窓生を含め、関係者の皆様のご理解とご協力が何にもまして必要ですので、よろしくご理解くださり、ご協力ご助言をお願い申し上げます。

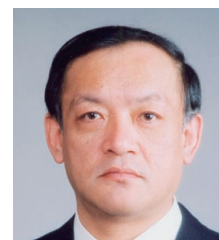
大学の動き

部局長の交替等

(新任)

生命科学系キャリアパス形成ユニット長

長田重一医学研究科教授(医学専攻分子生体統御学講座担当(分子生物学))が、鍋島陽一生命科学系キャリアパス形成ユニット長の後任として、平成21年1月1日付けで選出された。任期は3月31日まで。



新年名刺交換会を開催

平成21年1月5日(月)、恒例の新年名刺交換会を時計台記念館国際交流ホールにおいて開催した。岡本道雄、沢田敏男、西島安則、井村裕夫、尾池和夫の歴代総長をはじめ、多くの名誉教授、理事・監事、部局長、教職員など約250名の参加を得て、盛大に行われた。

まず、松本 紘総長より新年の挨拶があり、昨年10月1日の新体制発足後3ヶ月を振り返っての感想と、今後の京都大学の方針の説明があった。特に、本年は十干十二支では「己丑(キチュウ)」の年に当たり、これは混沌・混乱から脱出し、正しい方向に向けて出発する年ということであり、京都大学も牛の

ように確実に前進するとの力強い言葉があった。

引き続き、岡本元総長の発声により乾杯し、あちらこちらに歓談の輪が広がった。



(総務部)

第3回京都大学ホームカミングデイを開催

平成20年11月8日(土)、百周年時計台記念館等において、約200名の同窓生・現旧教職員の参加を得て「第3回京都大学ホームカミングデイ」を開催した。

午前中は、ノーベル賞を受賞された益川敏英名誉教授ゆかりの北部キャンパスと、整備が進む桂キャンパスそれぞれにおいて、見学ツアーを行った。

午後の同窓会全体会では、同窓会会長松本 紘総長の挨拶と、同窓会役員を代表して島根京大竹山光一氏の挨拶が行われた。その後、松本総長の「時

空と大学－京大のポジション－」と題する特別講演が、続いて本学人間・環境学研究科出身のクラシックピアニスト山浦可奈子さんによる記念演奏が行われた。

記念演奏会終了後の懇親会では、応援団チアリーダー部長樋爪彩子さんの司会進行で、井村裕夫元総



記念演奏を行う山浦可奈子氏

長の発声による乾杯の後、京大軽音楽部の演奏を楽しみながら和やかに懇談を深め、盛況のうちに終了した。

今回から新たな企画として、ホームカミングデイに合わせてクラス会や学科、地域同窓会の会合を募集したところ、百周年時計台記念館を会場として3つの同窓会が開催された。

参加者からは、「地域同窓会の活動や、今後の京都

大学の果たすべき役割について聞けてよかった」、「理工系の施設が充実しているのに驚き、うれしく思った」などの感想が寄せられた。



懇親会で乾杯の発声を行う
井村元総長

(企画部)

名誉教授称号授与式を挙行

平成20年11月24日(月)京大会館において、塩田浩平、江崎信芳、大西珠枝、西村周三、吉川 潔各理事・副学長の出席のもとに名誉教授称号授与式が挙行され、松本 紘総長から尾池和夫前総長に京都大学名誉教授の称号が授与された。



(総務部)

第12回京都大学国際シンポジウムを開催

平成20年12月5日(金)から6日(土)にかけて、百周年時計台記念館百周年記念ホールにおいて、「第12回京都大学国際シンポジウム:変化する人種イメージ表象から考える」を開催した。京都大学国際シンポジウムは、本学が誇る独創的な学術研究を世界に語りかけ、国際的に開かれた大学としての活動を積極的に展開していくために、平成12年度以降、毎年世界各地で開催している。

今回のシンポジウムは、京都大学教育研究振興財団および日本学術会議の後援を得て、2日間で延べ約430人の参加があった。悪天候にもかかわらず、内外の研究者や学生のほか、学界外からも多数の方々が集まり、大きな盛り上がりを見せた。

シンポジウムは、5日午後、岩井茂樹人文科学研

究所教授の総合司会のもと、松本 紘総長および金文京人文科学研究所長の挨拶によって開幕した。続いての趣旨説明では、本シンポジウム実行委員長、竹沢泰子人文科学研究所教授から、「人種」と言われるものをめぐり現実感が生まれ、それが持続するしくみについて、欧米の学説とは異なる見解が示され、京都大学の特色を生かした文理融合型の対話を通して、「差異」についての新たな考え方を探りたいとの呼びかけがあった。

続いてニューヨーク大学のエラ・ショハット教授による「ステレオタイプ、表象、『リアルなもの』—方法論をめぐる提起」



エラ・ショハット教授の基調講演

と題する基調講演，さらに学内外の研究者による発表，若手研究者によるリレートークが行われ，別室で行われたポスターセッションも活況を呈した。



レセプション会場にて：
左から松本総長，竹沢教授，横山機構長

同日夕方の国際交流ホールでのレセプションは，松本総長の挨拶，金所長の乾杯でスタート。本シンポジウムの発表者でもある東京大学総合文化研究科石橋 純准教授とアンサンブル・セレステの皆さんによるベネズエラ民族音楽が演奏され，明るいきりびらにに合わせて踊り出す人も現れて，和やかな親交の場となった。

2日目は，まず本学の横山俊夫国際交流推進機構長が歓迎の辞を述べ，本学の学風がつねに現場に立つことを重視すること，またそこから生まれる独創的な発見を語る際に強い言語意識を発揮してきていることを海外のゲストに説明した。その後，カリフォルニア大学バークレー校およびニューヨーク大学兼任のトロイ・ダスター教授による「人類遺伝学と人間の分類－流動性，連続性，変化」と題した基調

講演をはじめ，サセックス大学 マーガレット・スリーブーム＝フォークナー教授，インディアナ大学 マーヴィン・スターリング博士ら内外の研究者7名による発表があり，それらを踏まえて田辺明生人文科学研究所准教授の司会による全体討論が行われた。講演者，発表者はもとより，ヒトゲノムの微細な差異の国際統計解析事業に関わる松田文彦医学研究科教授や，各セッションの司会者



トロイ・ダスター教授の基調講演

も再登壇し，会場から提出された質問も取り入れつつ活発な意見交換が展開され，終了予定時刻を大幅に超えて，熱気のうちに閉幕した。その後，館内の京大サロンで交流会が開催され，講演者も交えて余韻を楽しんだ。

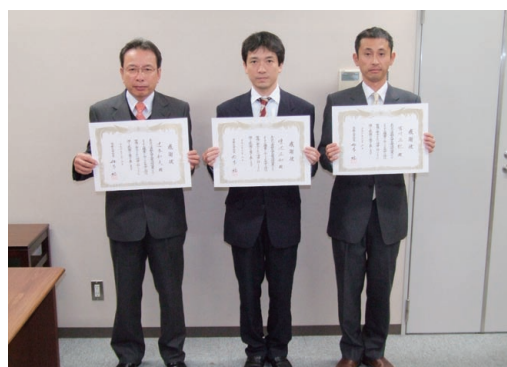
シンポジウム閉幕後の7日には，人文科学研究所において外国からの出席者を含む約20名による専門家会議が開かれ，理論化に向けてさらに掘り下げた議論が交わされ，京都大学国際シンポジウムの機会がさらに活かされることになった。

(国際部)

自衛消防団員に対して感謝状を贈呈

平成20年12月5日(金)，本部棟5階総務部長室において，自衛消防団員に感謝状および記念品が大西珠枝理事・副学長(総務・人事・広報担当)より贈呈された。

感謝状は，自衛消防団員を5年継続して務めた者に贈られることになっており，今回，感謝状を受けた団員は，辻本和夫(契約・資産事務センター)，増池正和(環境安全衛生部)，吉川正紀(施設環境部)の各氏である。



今回表彰を受けた辻本さん，増池さん，吉川さん(左から)

(総務部)

総長主催「外国人研究者との交歓会」を開催

平成20年12月16日(火)、百周年時計台記念館において、総長主催「外国人研究者との交歓会」を開催した。これは年末の国際交流恒例イベントとして、平成12年度から開催しており、京都大学で教育・研究に携わっている外国人研究者と、総長、理事や部局長など、外国人研究者と関わりのある本学教職員との交流を深めることを目的としている。

今回の参加者は、外国人研究者・日本人教員等合わせて約250名。参加者の所属も研究科・研究所・センター等約40の部局と、非常に多岐に亘った。

交歓会は、横山俊夫国際交流推進機構長の司会・進行により始まった。参加者同士でしばらく歓談した後、松本 紘総長から開会の挨拶があった。総長からの、今年の本学での研究や国際交流に関する重要事項に触れつつもアットホームな歓迎スピーチに、会場は一層和やかな雰囲気包まれた。続いて藤井信孝理事・副学長の発声による乾杯の後には、外国人研究者や受け入れ教員側ともに互い



乾杯の発声をする藤井理事・副学長

の研究内容などをテーマに会話が盛り上がり、普段あまり接することのない異分野の研究者同士が一つの空間で親交を深めるという場面が見受けられた。また、食事メニューの総長カレーや日本料理に人気が集まり、より一層歓談を盛り上げた。

約2時間の交歓会は、森 純一国際交流センター長の挨拶により締めくくられ、パーティの余韻を残しつつ、閉会となった。

なお、会場出口では、本学での教育・研究の一助として、刊行したばかりの『外国人研究者受入れハンドブック』が国際交流サービスオフィスから参加者に配付された。



外国人研究者と松本総長

(国際部)

平成21年度入学者選抜学力試験(第2次学力検査等)の実施日程

平成21年度入学者選抜学力試験(第2次学力検査等)を次の日程で実施する。

前期日程試験

月 日	教 科 等	学 部	時 間
2月25日 (水)	国 語	総人「理系」・教育「理系」・経済「理系」・理・医・薬・工・農	9時30分～11時
		総人「文系」・文・教育「文系」・法・経済「一般・論文」	9時30分～11時30分
	数 学	総人「文系」・文・教育「文系」・法・経済「一般」	13時30分～15時30分
		総人「理系」・教育「理系」・経済「理系」・理・医・薬・工・農	13時30分～16時
2月26日 (木)	論 文	経済「論文(論文Ⅰ)」	13時30分～16時30分
	外 国 語	総人(独・仏・中)・文・教育・法・経済・理・医「医学科(独・仏・中)・人間健康科学科」・薬・工・農	9時30分～11時30分
		総人(英語)・医「医学科(英語)」	9時30分～11時50分
	地 理 歴 史	総人「文系」・文・教育「文系」・法・経済「一般」	13時30分～15時
	理 科	教育「理系」	13時30分～15時
2月27日 (金)	論 文	総人「理系」・理・医・薬・工・農	13時30分～16時30分
		経済「論文(論文Ⅱ)」	13時30分～15時30分
	面 接	医「医学科」	9時～17時30分

(学生部)

部局の動き

サービス・イノベーション国際シンポジウムを開催

経営管理大学院では、文部科学省サービス・イノベーション人材育成推進プログラムの一環として、平成20年11月14日(金)、百周年時計台記念館百周年記念ホールにて「サービス・イノベーション国際シンポジウム」を開催した。

当日午前の部では、成生達彦院長からの開催趣旨説明と、吉田和男教授による本学「サービス価値創造マネジメント」教育プログラム取組の概要説明の後、カリフォルニア大学バークレイ校のヘンリー・チ



ヘンリー・チェスブロウ教授

ェスブロウ教授から、「サービス分野におけるイノベーション」(Open Services: Innovating Value in the 21st Century)と題する基調講演があった。製品開発の「オープンイノベーション」であまりにも有名なチェスブロウ教授であるが、サービス分野への理論展開も示唆に富み、理論に先行する現場としての産業界と連携しつつ、学術分野特有の貢献のあり方を志向すべきことなどが提言された。

午後の部では、二つのパネルセッションが行われた。パネル討論Ⅰは「サービス価値創出の方法論」と題し、IBM アルマーデン研究所サービス・プラクティス部門のジーネット・ブロンバーグ氏と富士通株式会社経営執行役の宮田一雄氏とを招き、梶山泰生准教授のコーディネートのもと、日米双方のIT業界でのフィールドワークを活用したサービス開発という、ユニークかつ最先端の試みが討議された。

パネル討論Ⅱは「顧客接点とサービス価値創造」と題し、ハイアット・リージェンシー京都総支配人の横山健一郎氏と柊家旅館女将の西村明美氏とを招き、日置弘一郎教授のコーディネートのもと、グローバル展開する高級ホテルと京都の伝統的旅館とで、おもてなしの価値創造実践や人材育成がどのように共通し、どのように相違するのかなどが議論された。

結びとして原 良憲教授から、登壇者をはじめ、共催、協賛、後援各団体への謝辞が述べられるとともに、今後の本学サービス・イノベーション人材育成カリキュラムの方向性や決意が表明された。

当シンポジウムへは、多種多様な産業・学術分野から大勢の聴衆に会場いただいた。そのほとんどの方が朝から夕方まで熱心に聴講し、また質疑に積極的に参加され、シンポジウムは大いに盛り上がった。来場者からは、本学の「サービス価値創造マネジメント」教育プログラムが掲げる「文理融合型アプローチ」ならではのバラエティに富んだ内容であったなど、好評をいただいた。



パネル討論Ⅱの様子

(経営管理大学院)

大学院情報学研究科創立十周年記念行事を挙げる

平成20年11月22日(土)、京都大学芝蘭会館(医学部創立百周年記念施設)にて、情報学研究科創立十周年記念行事が挙行された。



記念講演会で講演する三村所長

150名を超える参加者が集う中、記念講演会では喜連川 優東京大学生産技術研究所教授、三村昌泰明治大学先端数理科学インスティテュート所長・理工学部教授の両氏が、情報学と諸科学を絡めて講演され、聴衆を惹き付けた。また特別セッション企画では、研究科教員が自身の専門分野から多様に情報学を語り、多くの質問が飛び交う盛況ぶりであった。

引き続き行われた記念式典では、松本 紘総長の挨拶に続き、長尾 真本学名誉教授(国立国会図書館長、元本学総長)、徳岡公人文部科学省高等教育局長代理、大竹伸一 NTT 西日本社長の3氏が祝辞を述べられ、本研究科の将来に熱い期待を寄せられた。

祝賀会は、池田克夫本学名誉教授、西尾章治郎大阪大学理事・副学長、金出武雄カーネギーメロン大学ロボティクス研究所教授の3氏が挨拶を寄せられ、茨木俊秀本学名誉教授(関西学院大学理工学部教授)の乾杯の発声により開会した。各々が懐かしい面々との旧交を温め合う中、本研究科修了直後の若いメンバーによる近況報告もあり、終始和やかな雰囲気の中、記念行事は盛会のうちに幕を閉じた。



記念式典で挨拶する松本総長

(大学院情報学研究科)

日誌 2008.11.1 ~ 11.30

11月6日 役員会

7日 経営協議会

8日 第3回京都大学ホームカミングデー

11日 部局長会議

14日 学生部委員会

19日 国際交流委員会

20日 企画委員会

〃 役員会

21日 11月祭(～24日)

24日 名誉教授称号授与式

〃 名誉教授懇談会

25日 教育研究評議会

〃 ベトナム, Mai Trong Nhuan ベトナム国家大学ハノイ校学長他1名、総長他と懇談

寸言

京大らしさ

増田 寿幸



卒業から33年が経過しました。京都の信用金庫に勤務する私には、京都大学との接触機会は日常に頻繁にあるものではありませんが、たまたま、昨年の11月に、2度、現役の京都大学関係者と少しの時間を過ごす機会を得ました。そこで、これらの機会を通じて、私が大学と大学関係者について感じた雑感を、寸言として、以下に述べることにします。

最初の機会は、京都大学のAさん、北海道大学のBさんと1時間余り、昼食時にお話をすることがありました。その場でのこと、Bさんが「京都大学は、東京大学がやらない間にビジネススクールを立ち上げないと」というようなお話をされました。「東大から官僚養成校の意識が抜けないうちに京大が比較優位の地歩を築いては」という趣旨のBさんの京大への好意に満ちあふれたお話でしたが、Aさんは何となく賛否を曖昧にしていかなさうな様子が見えました。そしてその様子を隣で拝見していた私は、Bさんの提案に、違和感を覚えながら聞いている自分に気づきました。違和感というのは「東大と比べられてもなあ」という気持ちです。Aさんを含め現在の京大関係者が同じような感覚を持たれるかどうかは知りませんが、三十数年前の私の周りには、同じような感覚を持つ人が多かったように思います。さらに言うなら、現在でも、京都市民の通常感覚として、京都の経済や文化が首都圏のそれと単純に比較され、その優劣が論じられることを拒む気持ちがあると思います。「京都を東京と比べんといて」というような意識が相当に根強くあることは、地域金融機関の仕事を通じて日々実感させられるものです。その延長線上に「京大を東大と比べる必要はあらへん」という気持ちも間違いなくあるように

思うのです。ただし、これはたぶん、東京方面などからは、尊大というか、気位が高いというようなネガティブな評価を呼ぶはずですから、この日は、AさんにもBさんにも自分の違和感は伝えないままにお別れしました。

2度目の機会は、京都大学のCさんがアジア新興国の留学生Dさんを伴って信用金庫の本店を訪問いただいた時のこと。ご用件は、留学生のDさんがCさんの研究室で「協同組織による地域金融(信用金庫は株式会社ではなく協同組織)を勉強したいので協力してほしい」というものでした。国内の研究者ですら、協同組織金融の研究はマイナーな分野とされるのに、アジアの留学生が取り組むという点が珍しいと感じましたが、できる限りの協力を約束しました。その場でのこと、Dさんに「母国の発展のために資本市場の整備が喫緊の課題であると考えて、証券取引所の制度研究などに興味は持つことはありませんか?」と私が聞いてしまったのです。そうしたら、Cさんから「興味がないどころか、Dさんは当初はそれ以外に興味はないという状態でした」と強い口調で返答があり、Dさんとの研究テーマ策定過程の説明が始まり、新興国の真の産業発展には中小零細企業の層の厚い発展が不可欠で、そのためには協同組織金融の整備が注目されるべきであり、したがってDさんに必要な研究テーマは他に考えられないというCさんの持論が展開されました。Cさんの熱弁は「ありきたりの資本市場制度の研究なら他大学でやればよい」とも聞こえるほどでした。

私は、Cさんの熱い持論を聞くうちに、ひさびさに、時代に流されない頑固なまでに自由な学風に触れたような気がしました。そして、Aさんは、Bさんの「東大がやらないうちに」という言葉に不同意だったのかなとも思いました。米国発の金融危機に端を発した世界不況を前にして、ひたすらに時代に飲み込まれる日常を送る私に、Cさんは、まことに京大らしい好ましい先生に見えたものです。

(ますだ としゆき 京都信用金庫 理事長 昭和50年理学部卒)

随想

「fundamental」と「basic」な基礎研究

名誉教授 井上 信

敗戦直後、理研・阪大・京大のサイクロトロンが占領軍によって破壊撤去され、米国内の科学者達の批判が大きくなった頃、日本における基礎的な原子核研究は認めるべきだという米国の新提案が極東委員会では結局認められず、いっさいの原子エネルギー研究の禁止政策が続いた。最近まで日本学術振興会ワシントン研究連絡センター長であった政池明名誉教授が、在米中に米国立公文書館で見つけた文書によると、このとき米国側は基礎研究を再定義して、応用が念頭にある basic research ではなく、実用を目的としない知的な行為である fundamental scientific research を認めるべきであると主張したがダメだったということである。かねて基礎研究に2種あって fundamental と basic という区別をしていた私は、先人が同じ言葉を使っていたことを知りおもしろかった。

大学等の基礎研究と産業の現場における実用研究の間にギャップがあって、死の谷などといわれる。私の専門に近い例では、小林・益川に代表されるクォークの物理は、大学や大学共同利用機関が主役となる、いわゆる役に立たない fundamental physics である。紙と鉛筆だけではできないのだが十分には理解されず、予算要求のときに加速器が何の役に立つかといわれて苦勞する。放射光や原子炉の段階になると材料や医療のための basic research が主になる。しかし、この段階では役に立つ技術であることは示すべきだが、まだ基礎研究であり採算性を問うべきではない。我が国は欧米の大学にはない工学部を発明したといわれるが、これが死の谷を越える basic research の拠点として重要な役割を担った。いまは文部科学省所管の理研や原子力研究開発機構などの研究所が主役となってきている。その次には



実用化するための研究があり、採算性が重要になる実証研究段階である。これは経産省所管の産総研などの研究機関が主役となるべきものである。そして最後が企業で、一円でも安く大量生産するための商品化研究の段階ということになる。粗っぽく4段階に分けたが、これらは連続的に重なり合っており、逐次的ではなく併行して進められるものである。

産学官連携という場合にも、単に大学や企業や国の研究所を平面的に並べて同じことをするのではなく、このように立体的に役割を位置づけて連携すべきである。大学が短期間競争を強いられて、新聞に載せられるようなすぐ役立つ研究にのみ精力を費やすようになっては、大学の役割は果たせない。各段階別の評価の物差し作りが必要である。これは文科省の大学・大学共同利用機関の評価委員会の専門委員をしていた時に感じたことである。

基礎研究機関で運営費交付金を減らして競争的経費を増やす風潮はよくないと思っていた私が、最近、文科省の競争的経費によるプログラムである「量子ビーム基盤技術開発プログラム」のプログラムディレクター(PD)を引き受ける羽目になった。我が国の原子力系の人達が、「原子力」の代わりに「量子」という言葉を多用するようになってともに、「量子ビーム」という言葉が発明されて行政的には定着し、直訳した Quantum Beam という和製英語も使われ出した。粒子と光子をまとめて量子としたのであろうが、fundamental science のための粒子加速器に関わってきた者としては違和感がある表現なので、プログラムの英語名は自由に付けられるから PD が考えてくれといわれたときには困った。関係者と相談したが結局「Quantum Beam Technology Program」となった。これは basic research を目指したプログラムなのでこれで良いかと自らを納得させた。はからずも物差しの違いを実感しつつ、死の谷に挑む「量子ビーム」の旗振りをしているところである。

(いのうえ まこと 平成15年退職 元原子炉実験所教授、専門は原子核物理学・加速器科学)

洛書

京大生をデータで見る

溝上 慎一

とにかく印象で語られがちな京大生の実態を、ここではデータで見てみたい。示すデータは、2005年11月に2回生を対象に実施した全学調査のものである。全学共通科目・英語部会の協力を得て、語学クラスでデータを収集した。



2回生は、1回生と異なり、単位取得にあくせくするわけでもなく、さりとて専門の勉強が集中的に始まっているわけでもない、そういう合間の時期であり、大学の学生の質がもっとも露骨に現れる学年である。自由の学風を標榜する京大生の実態は？という問いにもストレートに解を与えてくれる。

図1の学生タイプは、以下の手続きによって算出されたものである。①大学生生活を構成する17項目(授業、自主学習、読書、マンガ・雑誌、クラブ・サークル、アルバイト、同性・異性の友人とのつきあい、テレビ、ゲームなど)に対して1週間に費やす時間数を尋ねる、②それを3次元(因子分析)にまとめる、③3次元の得点を用いてクラスター分析を行う。昨今の学生はどんなタイプの学生でも、けっこうな時間数を授業に費やすので、その時間数はこうした学生分類には効いてこない。学生分類に効いてくるのは、①「友人／クラブ・サークル」、②「自主学習／読書」、③「テレビ／ゲーム」に時間を費やしているか／費やしていないか、である。

図1を見ると、自学自習をやっている学生タイプはGroup 1, Group 2であり、全体の26%。3分の1にも満たない。意外なのは、両タイプともけっこうな時間数をテレビ・ゲームに費やしていることだ。Group 2はそのなかでも、友人とのつきあい、クラブ・サークルもするHigh Performerな学生タイプであ

る。一般的には、現代大学生の理想像として全国で注目されている。昔ながらの体育会系・学生タイプはGroup 3である。Group 4は何もしていないわけではないが、とくに特徴がない、何でもほどほどの学生タイプである。

大学生活がもっとも充実しているのはGroup 2とGroup 3で、両者に有意差は見られない。しかし、思考力やリーダーシップなど技能や態度レベルで成長していると実感しているのはGroup 2のほうである。大学院への進学アスピレーションは、修士・博士課程を分けて聞いても、学生タイプに有意差は見られない。どの学生タイプからもそれなりの進学アスピレーションが見いだせる。図2は学部別に見たものである。ご自身の関心にあわせて、どの学生タイプが多いか、ご覧いただければ幸いである。

(みぞがみ しんいち 高等教育研究開発推進センター 准教授 専門は青年心理学)

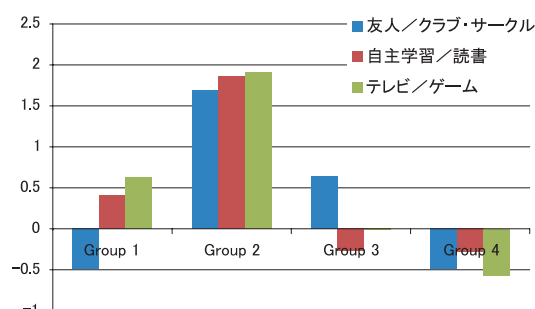


図1 大学生生活の過ごし方から見た学生タイプ
(クラスター分析・Ward法)

(注)各 Group の内訳は、Group 1 (N=204), Group 2 (N=69), Group 3 (N=319), Group 4 (N=448), 計1040名である。

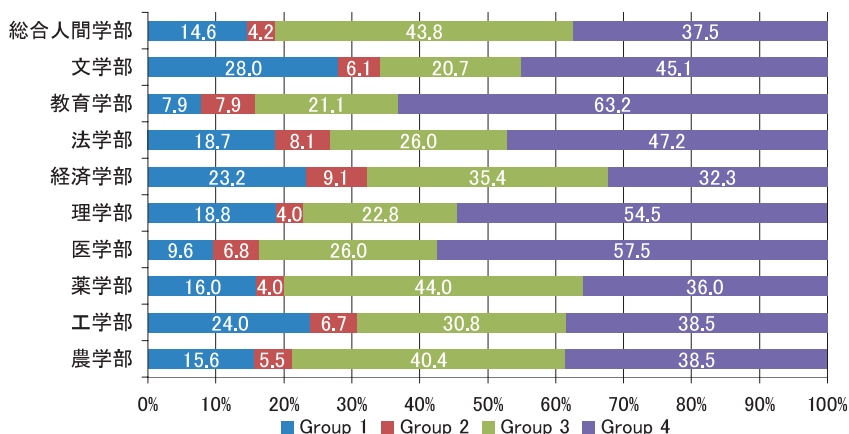


図2 学部別の学生タイプの度数分布

(注)学部別の内訳は、総合人間学部(N=48)、文学部(N=82)、教育学部(N=38)、法学部(N=123)、経済学部(N=99)、理学部(N=101)、医学部(N=73)、薬学部(N=25)、工学部(N=312)、農学部(N=109)、計1010名である(欠損値学生を除く)。

栄誉

坂口志文再生医科学研究所長が慶應医学賞を受賞

このたび、坂口志文再生医科学研究所長が第13回慶應医学賞を受賞された。授賞式および受賞記念講演会は、平成20年11月21日に慶



應大学信濃町キャンパスの北里講堂で行われ、翌22日には受賞記念シンポジウムが開催された。

慶應医学賞は、基礎医学・臨床医学ならびに医学に密接に関連した生命科学の諸領域を対象として、世界の医学・生命科学の領域において医学を中心とした諸科学の発展に寄与する顕著、かつ創造的な業績をあげた研究者を顕彰するため、1996年の創設以来、国内外の多数の有識者から推薦された候補者の中から、国内・国外の研究者それぞれ1名ずつ計2名に授与されてきた。過去3名の受賞者が、後にノーベル賞を受賞している。

同所長は、昭和51年京都大学医学部を卒業、同年大学院医学研究科に進学、同58年京都大学医学博士の学位を授与された。医学部卒業後は、医学部附属

病院医員等を経て、外国の大学や研究所の研究員等を歴任したあと、平成4年新技術事業団「さきがけ研究」専任研究員、同7年東京都老人総合研究所免疫病理部門長、同11年京都大学再生医科学研究所教授を経て、同19年10月より再生医科学研究所長に就任し、現在に至っている。

また、平成15年に持田記念学術賞、同16年に米国Cancer Research Instituteより、William B. Coley賞、同17年に武田医学賞、高峰記念三共賞、同19年に文部科学大臣表彰科学技術賞、同20年に上原賞を受賞されている。

同所長の受賞理由は、免疫応答のブレーキ役となるリンパ球(制御性T細胞)を発見し、制御性T細胞の機能、各種免疫疾患における役割の解明、さらにこの細胞の発生の鍵となる遺伝子を同定した業績に対するものである。

今回の受賞は、同所長だけでなく、再生医科学研究所、また、京都大学にとっても大変名誉なことであり、今後の活躍が期待される。

(再生医科学研究所)

話題

工学研究科附属環境安全衛生センター主催「空気呼吸器装着実技講習」、 「普通救命講習会」、「桂キャンパス消火器訓練」を実施

工学研究科を主体とする桂キャンパス構成員（教職員、学生）を対象に、同研究科附属環境安全衛生センターが主催して例年開催している空気呼吸器装着実技講習（宇治地区は、宇治地区総合環境安全管理センターおよび宇治地区事務部施設環境課との共催）、普通救命講習会および桂キャンパス消火器訓練を下記のとおり実施した。普通救命講習会および



化学防護服（赤）と耐熱防護服（銀）を着用した空気呼吸器装着実技講習風景

消火器訓練は、西京消防署からご指導いただいた。

特に工学研究科では、酸素欠乏、有毒ガスの発生、漏出対策用に空気呼吸器を桂キャンパスに30

台、吉田キャンパス、宇治キャンパスそれぞれに5台ずつ配備している。また、AED（自動体外式除細動器）を桂キャンパスに6台、吉田物理棟に1台配備している。これらの設備機材、消火器は、緊急時に救助、避難、救命、消火のため存在箇所を知るだけでなく、使用方法を体験して精通しておくことが大切である。

次回開催時には、さらにより多くの未体験の教職員、学生の参加を呼びかける。

講習等	場 所	日程(平成20年)	受講人数
空気呼吸器 装着実技講習	桂キャンパスEM棟	11月10,11,14,19,20日	164名
	吉田キャンパス物理棟	11月27日、12月4日	
	宇治キャンパス総合研究棟	12月2日	
普通救命 講習会	桂キャンパス	11月13,28日	42名
桂キャンパス 消火器訓練	桂キャンパス Aクラスター	11月21日	約80名

(大学院工学研究科)

テクノ愛'08最終選考会を開催

平成20年11月23日(日)、ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー(VBL)にてテクノ愛'08最終選考会を開催した。テクノ愛'08には、全国から399件(高校の部332件、大学の部67件)の応募が寄せられた。

一次審査を通過した18件(高校、大学の部各9件)の最終選考会には多くの来聴者があり、活発な質疑応答が行われた。また本年度は、本コンテストで過去2度のグランプリ受賞経験のあるロボ・ガレージの高橋智隆氏をはじめ、VBLで進めている電気自動車プロジェクト、特許に関する基礎知識について

の計3つの記念講演も併せて行った。

審査の結果、高校と大学の部でグランプリ、準グランプリなど計18件、さらにその中から「ベンチャー創出に期待できる」発表に対して、テクノ愛記念賞1件が選ばれた。参加者からは、アイデアを練り直してまた来年も挑戦したい等の意見があり、大盛況のうちに終了した。会の運営、最終選考の審査結果も含め、本 Web サイト (<http://www.vbl.kyoto-u.ac.jp/Contest/>) で公開している。



最終選考発表者(高校の部)の記念撮影



最終選考発表者(大学の部)の記念撮影

最終審査受賞者一覧(敬称略)

高校の部	グランプリ 「右折車が引き起こす渋滞を解消するシステムの開発」	大俣 美佳(愛知県立高蔵寺高等学校)
	準グランプリ 「ポータブル点字器」	中野 さゆり(京都府立洛北高等学校)
	京都大学 VBL 施設長賞 「フラワースタンド」	三津谷 慎治, 斗沢 拓実, 中野 渡遥, 蔵川 千穂, 橋端 早紀(青森県立三本木農業高校)
	優秀賞 「ぺたぺたエイド☆」	藪田 麻美(京都府立京都すばる高等学校)
	アイデア賞 「超伝導シートの発明」	坂本 祐作, 岩田 陸, 堀田 啓介(京都府立嵯峨野高等学校)
	「ごみと蒸留水で潤滑剤の開発」	柴垣 貴文, 松村 将太郎, 土屋 裕介(名城大学附属高校)
	奨励賞 「紫外線 LED を光源とした蛍光光度計の作製」	辻本 萌(京都市立堀川高校)
大学の部	「いつも清潔ヘアブラシ」	中西 朝日(京都府立京都すばる高等学校)
	「首元ひえひえポケット」	村上 ゆづき(京都府立洛北高等学校)
	グランプリ、テクノ愛記念賞 「手軽に作れる『ニュー・エッグアート』の考案」	大俣 友佳(名古屋大学)
	準グランプリ 「エアクリーニング・プランツ」	木村 あかね(筑波大学)
	京都大学 VBL 施設長賞 「インターネット de バーコード」	妹背 武志, 尾花 将輝(阪南大学・阪南大学大学院)
	優秀賞 「カットとストリップを同時に行うワイヤストリップ」	井上 恵介(大阪大学)
	アイデア賞 「昇華性物質混合による高機能多孔性燃料電池電極の形成」	Yuwa Chompoobutrgool(京都大学大学院)
	「色オルゴール」	呉 剛志, 阪口 翼, 松田 奈緒, 赤土 一行, 山上 諒(大阪府立大学)
	奨励賞 「LED走行誘導表示板をもちいた、事故・渋滞低減手法の提案」	細川 義浩(京都大学大学院)
	「非対称化イヤホン」	* (京都大学大学院)
	「X線吸収による遷移元素の原子価精密決定」	長谷坂 彰史(京都大学大学院)

* 名前公開を許可された方のみ掲示。

(ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー)

JSPS-VCC 拠点大学交流事業「環境科学」第3回包括セミナーを開催

工学研究科ではJSPS拠点大学交流事業に関連し、平成20年11月27日(木)、28日(金)の2日間にわたり「JSPS-VCC 第3回包括セミナー」を桂キャンパスの工学研究科Cクラスターで開催した。

本事業は、経済発展の過程で生じる環境問題を克服し、ゼロ・エミッション社会の構築を目的とするもので、平成12年度より開始し、今年



グループごとの会議の様子

度で9年目を迎える。今回のセミナーでは、全10グループがそれぞれのテーマについて、これまでの研究成果の総括と今後の研究活動に関する活発な議論を行った。

セミナーには計90名(日本側39名、マレーシア側50名、その他1名)の研究者が参加した。開会式では、日本側からは大寫幸一郎工学研究科長とコーディネー

ターの松岡 譲工学研究科教授から、マレーシア側からはコーディネーターの Dato' Dr Muhamad Rasat Bin Muhamad マラヤ大学副学長から挨拶があり、記念品の交換が行われた。両国のコーディネーターは、今後も学術交流を積極的に続けていくことで合意した。

今後も工学研究科では、本事業を通じて得られた学術成果はもとより、研究交流を通じて築かれた豊かな人的ネットワークを生かし、事業終了後も新たなプロジェクトに発展的に継続し、社会に還元していくことを目指す。



集合写真

(大学院工学研究科)

化学研究所「第108回研究発表会」を開催

化学研究所は、平成20年12月5日(土)に宇治キャンパスの木質ホールにおいて、第108回研究発表会を開催した。

冒頭、時任宣博所長より「研究発表会は、研究成果の公开发表の場として重要であるだけでなく、所内の他の研究室がどのような研究をすすめているのか、お互いに詳しく知る良い機会でもあり、自分の研究内容を専門外の人にも分かり易く説明する良い練習にもなる。所外への研究紹介の場としてだけでなく、所内でも高めあう場として活用してもらいたい」との挨拶があった。

午前の部では、

・池ノ内順一准教授「細胞の極性形成に関わる膜



時任所長(左から2人目)と受賞者3名

ドメインの形成・維持機構」

・阿久津達也教授「化合物の分類と設計のためのカーネル法」

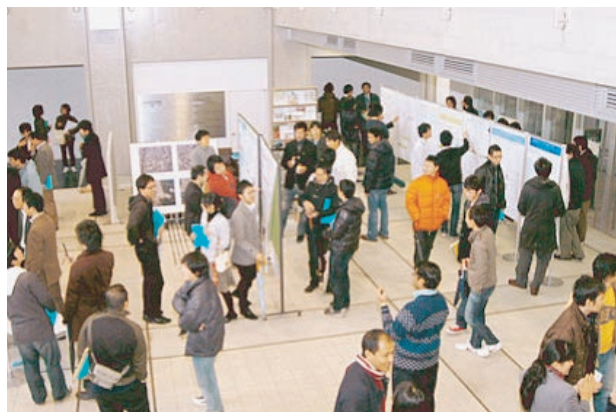
の講演が行われた後、京大化研奨励賞・京大化研学生研究賞の授与式ならびに受賞者3名による講演が行われた。また、総合研究実験棟では70件のポスター発表が開催され、いずれのセッションも活発な質疑応答が行われた。

午後の部では、次の講演が行われた。

- ・水畑吉行助教「“重い芳香族化合物”の化学」
- ・村田靖次郎准教授「開口ならびに内包フラーレンの合成と性質」
- ・吉村智之助教「面性不斉エノラートを経る不斉合成法の開発」
- ・倉田博基准教授「ナノティップ電子銃を搭載した走査型透過電子顕微鏡の開発と局所分析への応用」
- ・齊藤高志助教「A サイト秩序型ペロブスカイト酸化物 $AA_3B_4O_{12}$ の探索とその物性」
- ・滝田 良助教「チオフェン骨格を有する all-cis

ポリ(アリーレン ビニレン)の合成とその特性」

本研究発表会は、所内を含む100名を越える参加者を得て、一般参加者にも分かり易く興味深い研究成果が発表され、活気ある発表会となった。終了後は、教職員・大学院生等250名の参加を得て、研究発表会懇親会が宇治生協会館にて盛大に行われた。



ポスター発表会場風景

(化学研究所)

平成20年度能楽鑑賞会を開催

第52回京都大学能楽鑑賞会が平成20年12月10日(水)に京都市左京区の京都観世会館で開催された。

この能楽鑑賞会は、創立記念行事音楽会とともに、本学学生教職員のための課外教養行事として毎年開催されているものである。

今回は約600名が来場し、会場は超満員となった。狂言「千鳥」では笑いに包まれ、能楽「敦盛」では美しい舞を固唾を吞んで見つめるなど、伝統芸能の豊かな世界に会場全体が魅きこまれている様子であった。

初めて能・狂言を観るという1回生・留学生から本会に20回以上参加しているという名誉教授まで、来場者は身分も年齢も様々であったが、当日実施したアンケートでは「伝統芸能という敷居が高いのかと思っていたが、何の予備知識もなく観て、こん

なに楽しめるものとは知らなかった」「課外教養行事の企画をもっと増やしてほしい」「来春卒業するがとてもいい思い出になった」「ぜひ今後とも続けていてほしい」など、感動の声が聞かれた。



片山清司、福王和幸、片山九郎右衛門 各氏らによる能楽「敦盛」二段之舞

(学生部)

隔地施設 紹介



防災研究所附属地震予知研究センター阿武山観測所

(<http://www.rcep.dpri.kyoto-u.ac.jp/main/obs/abu/abuJ.html>)

阿武山観測所は、大阪府高槻市の北方、標高281mの阿武山山頂から南へのびる尾根の突端頂部、通称美人山の山頂付近にあります。美人山の標高は218m、山麓を有馬－高槻断層帯に境され、隆起した北摂山地の南端に位置し、天然の展望台となっています。塔の屋上はもちろん、本館の2階以上からも、大阪平野を一望することができます。晴れた日には淡路島や関西国際空港までも遠望でき、夜となれば、眺望は地の果てまで続くような無数の光の海に変わります。六甲山からの夜景は1000万ドルと良く言われますが、阿武山はそれ以上ではないかと思えます。

眺望の良さは古代から有名だったようで、美人山の山頂には、阿武山古墳が存在します。この古墳は、初代所長志田 順が、地震計用のトンネルを掘削しているとき(1934年)に偶然発見したもので、石室からは漆塗りの棺に横たわった貴人(のミイラ)が現れました。志田は、埋葬物について、当時としては最新技術であるX線写真を撮っていました。しかし、「不敬」にあたるとしてその存在は内密にされ、1982年に観測所の物置の奥からX線写真が再発見されるまで歴史に埋もれていました。再発見されたX線写真の解析により、貴人が頭を横たえていた枕はガラス玉を銀の糸でつないで錦でくるんだ「玉枕」であること、衣は金糸の刺繍があったことから、貴人の身分の高さが想像され、藤原鎌足ではないかと言われています。1983年、文化庁により阿武山古墳として史跡指定されました。

阿武山観測所は、1927年の北丹後地震(マグニチュード7.3、犠牲者約3,000人)の発生後、地震の研究を進めるため、1930年に設立されました。原奨学金の援助を受け、地元からは約3万坪におよぶ用地を300年間の契約で借用させていただいています。建物は、斜面であることを生かし、2階建ての西館と3階建ての本館・東館を上下および左右にずらす変化を与えています。2007年(平成



玄関

19年)に大阪府の近代化遺産総合調査報告書において、注目すべき近代化遺産として取り上げられており、

建物を目的とする訪問者も多数います。上記の報告書によると、西館と本館をつなぐ玄関ホールは建築全体の要で、吹き抜けの内部にある2列の太い丸柱の上部は逆円錐台形になっており、モダン化されたギリシャ神殿の内部を見ているようだという事です。

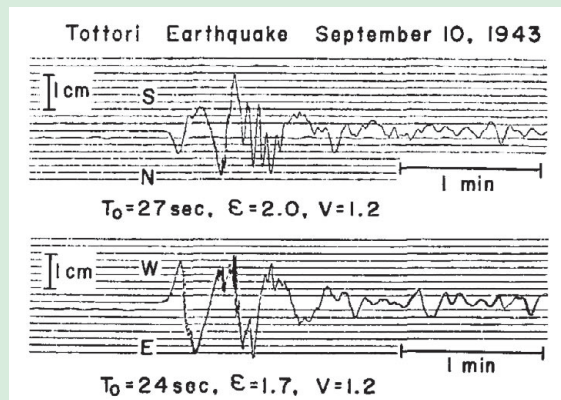
志田は、京都大学理学部の地球物理学講座の初代責任者でしたが、東京大学との違いを独自の観測に求め、明治から昭和初期にかけて、上賀茂地学観測所、地球物理学研究施設(別府)、阿蘇火山研究所、阿武山観測所を次々と開設し、地震学と測地学の観測と研究を積極的に展開しました。これらの観測は、当時としては大変先進的なものであり、それら観測に基づき、地球潮汐における志田数、地震波初動の四象限型押し引き分布、深発地震の存在など、1930年代としては極めて先駆的な発見が行われました(注)。

阿武山観測所では、開設と同時にウィーヘルト地震計(1トン)が設置され、その後も最新の地震計の導入や各種の地震計の試作・改良が行われ、佐々式大震計などが追加されました。世界で初めて地震波を電気変換して今日の高性能の地震観測の先鞭を付けた、ガリチン地震計も設置されました。1960年代からは、世界標準地震計網の一つとして、プレス-ユーイング型長周期地震計による観測も開始され、地球物理学の発展に貢



佐々式大震計

献しました。広帯域・広ダイナミックレンジの観測体制により、世界の第一級地震観測所として評価され、観測結果は、1952年から1996年まで、Seismological Bulletin, ABUYAMA として世界中の地震研究機関に配布されました。長年続けられた地震観測により、1943年鳥取地震、1944年東南海地震、1946年南海道地震、1948年福井地震等の貴重な記録が得られ、地震現象の解明に大きく貢献しました。なかでも、佐々式大震計による鳥取地震および福井地震の長周期(10秒から30秒)波形は、金森博雄博



佐々式大震計による1943年鳥取地震の地震記録

士(カリフォルニア工科大学名誉教授、平成19年度京都賞受賞)の断層モデルによる解析(1972年)に使われ、世界的に有名となりました。また、プレート境界地震の発生予測は、基本的には、アスペリティモデルと呼ばれる、「同様の地震が同じ場所で繰り返す」というモデルに基づいて行われていますが、このモデルの検証のためには、同じ場所で発生した大地震の波形の比較が極めて重要です。最近の例では、阿武山観測所に保管されていた1933年、1936年、1937年の3発の宮城県沖地震の記録は、アスペリティモデルに基づく2004年宮城県沖地震の中期的発生予測において重要な貢献を果たしました。

(注) 論文としては、和達清夫の方が早く出版された。

これらの歴史的な地震計たちは、現在はその役割を終えています。当時の姿そのままに、本館・東館地下の観測室に展示されています。

地震予知研究計画発足前夜の1962年には、防災研究所に、「本邦地震活動度の地理的分布調査のための観測事業」経費が交付され、阿武山観測所も分担して、観測網による微小地震観測が開始されました。その後、1973年には、阿武山観測所に地震予知観測地域センターが併設され、1975年からは近畿北部に展開した観測網の記録を定期的にオンラインで収録する微小地震観測システムが稼働し始め、リアルタイム自動処理も行われました。国内はもとより世界で初めてのこの自動処理定常観測システムは、計算機によるオンライン自動読み取り処理結果をグラフィックディスプレイでオペレーターがマニュアル修正するなど、30年以上前としては大変先進的なものであり、データの質と量をそれ以前に比べて飛躍的に高めました。その後、これらのシステムは全国的に普及し、現在の地震観測方式の基となっています。これらのデータに基づき、計算機による微小地震の震源決定、微小地震の発震機構の解析、地震発生域の深さの変化と大地震の断層との関係や、地震発生域の応力場と強度についてなどの先駆的な研究が行われました。このシステムは、1995年兵庫県南部地震以降、防災科学技術研究所の Hinet のシステムに発展し、業務的な観測として全国展開され、多数の世界的な成果を挙げています。

また、1971年には、敷地内に総延長250m を越える観測坑道が設置されるのに伴い、地殻変動連続観測や地下水観測なども実施され、近畿地方における地震予知研究のための各種基礎的なデータが蓄積されています。地震や地殻変動観測だけでなく、1918年に理学部で開始された高温高压実験の装置は阿武山観測所に移設されたうえ、科研費等により高压装置等が次々に追加され、高温高压下での岩石の変形・破壊実験等も行われていました。

1990年、理学部および防災研究所に属する地震予知関係部門が統合され、防災研究所附属地震予知研究センターが設立されました。1995年の地震予知研究センター研究棟竣工に伴い、阿武山観測所の主な観測装置および人員も宇治キャンパスに移転することになり、これから近畿地方での本格的な地震観測が始まろうとしていた矢先、それに先んじて、1995年1月、兵庫県南部地震が発生しました。

残念ながら兵庫県南部地震の発生後でしたが、上記の微小地震観測網のデータ等に基づいて、兵庫県南部地震

の発生過程に関する仮説が提唱されました。実は、内陸地震がなぜ起こるのかという問題は、当時はほとんど不明だったのですが、六甲断層帯や有馬-高槻断層帯の北側の地震発生層の下に、水平に近い断層が存在し、それがゆっくりすべることにより、兵庫県南部地震の地震断層がすべりやすくなったという新しいアイデアが発表されました。この仮説は、その後、内陸地震研究において先導的な役割を果たし、近年の内陸地震の発生メカニズムと発生予測の研究の進展に大きく貢献しています。

ここで、ようやく現在の話に入ります。現在、西南日本の内陸で地震活動が活発化していると言われて



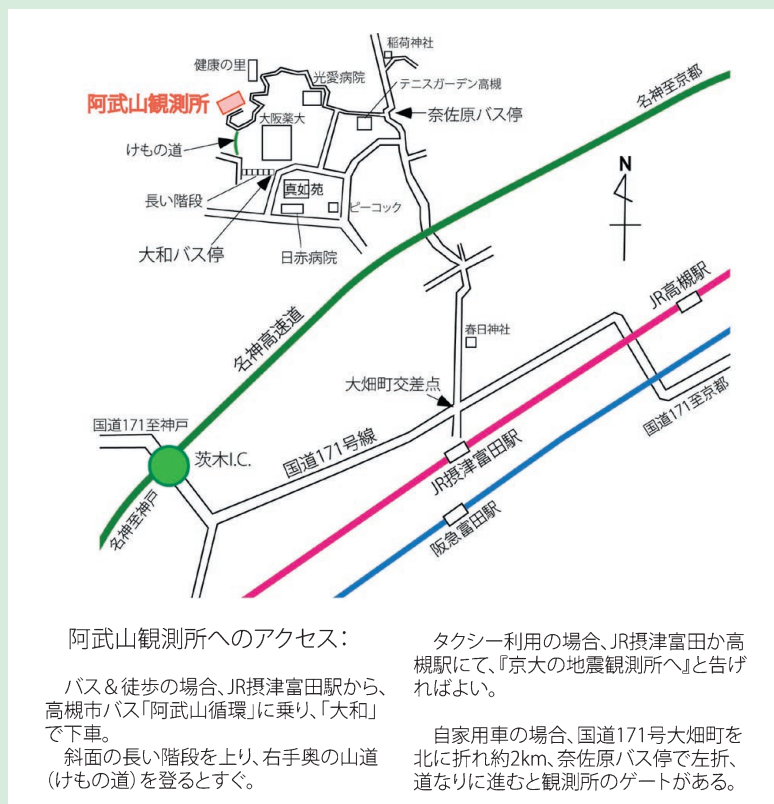
「満点」地震観測システム

います。過去約1千年のデータによると、南海トラフの巨大地震の前50年後10年の期間には、それ以外の期間に比べて、西南日本で被害地震の数が約4倍となっています。次の南海トラフの巨大地震は、今世紀半ばまでに起こる確率が高いと言われていますので、近畿地方でも内陸大地震の活動期に入ったと考えられます。さらに、最近、近畿地方中部、北摂・丹波山地を中心として微小地震活動の低下(静穏化)が見られています。2003年頃より、微小地震活動が約3割少なくなっている訳ですが、同様の静穏化は兵庫県南部地震の前にも見られており、現在その推移を注意深く見ています。

しかしながら、既存の観測網の観測点間隔は数十km程度であり、それは内陸大地震の断層のサイズと同程度となっています。そのため、上記の静穏化の意味することや、近畿地方の断層にどのようにひずみが集中しているかなど、内陸大地震の発生予測に直接役立つ情報を得ることは難しくなっています。

幸いにして、平成18年度総長裁量経費(超多点フィールド計測システムの開発)をいただき、それをベースとして、安価で取り扱いが容易でかつ高性能の地震観測システムを開発しました。これまでの装置と違って、1万点規模の観測が可能なことから、「満点」地震観測システムと名付けています。この装置を近畿地方等に多数設置し、内陸大地震の発生予測と被害軽減に貢献したいと考えています。有馬-高槻構造線近傍の北摂山地にある阿武山観測所は、そのための重要な前線基地となります。

以上のように、阿武山観測所は、発足当時から地震の観測研究において世界をリードしてきました。最近開発された「満点」地震観測システムも、現時点では世界最高のオフライン地震観測システムであり、トップランナーとして、これからも地震防災研究を支えていきたいと考えています。



観測所への案内図

連絡先

〒569-1041 大阪府高槻市奈佐原944

TEL: 072-694-8848

FAX: 072-692-3715

職員構成

教員 3名
(全員兼任、平成21年度から教授1名が常駐予定)
技術職員 1名(現地勤務)

アクセス

- ・JR神戸線摂津富田駅から、高槻市バス「阿武山循環」に乗り、「大和」にて下車、徒歩15分
- ・名神高速道路茨木ICから約20分